アダム・スミスの道徳哲学とレトリック（下の２）
On Adam Smith's Moral Philosophy and Rhetoric（4）

平野　英一
Eiichi HIRANO

はじめに　問題へのアプローチ
第１章　スミスの「修辞学・文学講義」と道徳哲学との関わりをめぐって
　１.「修辞学・文学講義」の概要
　２.「修辞学・文学講義」についてのこれまでの論考について
第２章　スミスの思想体系における「修辞学・文学講義」と道徳哲学との関係をめぐって
　１．ブラウンによるスミスのテキスト解釈
　２．公平無私な観察者と良心のストア的モデル
　３．スミスの徳の体系のストア的ヒエラルキー
＜以上（上）第６集　2002年３月＞
第３章　『道徳感情論』のレトリック
　１.『道徳感情論』にみられるレトリックの諸要素
　２．批評家と劇場
＜以上（中）第８集　2004年３月＞
第４章　理性と想像力――アートとしての哲学（＝科学）
　１．理論的探求――ワンダー（驚異）と想像力
　２．天文学理論体系の歴史的展開
　３．スミスの科学的探究論をめぐって
　４．科学的探究―模倣芸術―言語の関係
＜以上（下の１）第10集 2006年３月＞
第５章　スミスの道徳哲学体系のレトリック
　１．スミスの想像力にもとづく探求と理論化のレトリック的構想
　２．道徳哲学体系の一部としての『国富論』とレトリック
＜以上（下の２）第12集 2008年３月＞

第５章　　スミスの道徳哲学体系とレトリック

１．スミスの想像力にもとづく学的探求と理論化のレトリック的構想

前章までにおいて、『修辞学・文学講義』に見られるようなアダム・スミスのレトリックに対する深い関心は彼の道徳哲学の体系構想にどのように関わっているのか、という問題

意識から出発して、それに関連する諸相について考察を繰り広げてきた。さらに考察を先に進める前に、いったんこれまでの考察から引き出された結論について簡単にふりかえってとりまとめておきたい。

『修辞学・文学講義』においてスミスが示しだそうと努めたものは旧来のレトリックのような文の<あや>の技ではなく、文学的な想像力に支えられた「話し手と聞き手の双方の共同による現実の論理的考究と再現の術」(1) としてのレトリックであった(2)。

われわれはまずこのような意味でのレトリックの構想が、いかに『道徳感情論』の論述と構成に貫徹しているかを見てきた。そうしてスミスにとって、道徳哲学の言説はその本質からいって上述の意味でレトリカルでなければならないことがあきらかになった。つまり道徳というものを理解し、それを理論化するということはスミスにとってはレトリックが必然的に要請されるということであった。それらの点が『道徳感情論』におけるレトリックの次のような基本的な相面の考察から明らかにされた。

人称代名詞の一人称の「わたし」と「われわれ」、二人称の「あなた」と「あなたがた」の巧みな使用によって、行為当事者と観察者の相互同感の展開が活写され、その過程の中に読者自らがあるときは当事者として、またあるときは観察者として引き込まれて同感的に納得しながら道徳事象の理解が深められていくかたちで考究の論究が進められる。さらに一人称「われわれ」には、その状況にありながらそこでの行為者と観察者の相互同感の動きの真相を距離をとって観察し批評する哲学者ないし理論家の、あるいは著者の、読者に対する説得的な視座を提供する役割も織り込まれている。こうしたレトリック的な配慮は、道徳的事象について語りえるのは外的な視座からではなく、その特殊な状況的文脈の中から内在的になされる場合であること、それゆえ道徳的事象の理論化はわれわれの日常的な自己理解にある共通基盤から反省を潜り抜けて説得的に理解がたかめられていくことでなければならない、という道徳についてのスミスの根本的な考え方を表わしているといえるのである。

また文学、演劇、日常生活からの物語等のからの例証によって推論が進められていることは、それによってわれわれ読者の注意を状況の特殊な経験にひきよせ、想像力の働きを生き生きと促してその同感的理解を推し進めている。こうした例証に関するレトリック的配慮も、道徳的事象を理解し評価するためにはその状況的文脈の特殊性に関わらねばならないというスミスの構想にもとづくものであった。

さらに『道徳感情論』の第１部から第７部までの体系的な論述構成自体がレトリック的配慮によってなされていた。冒頭の第１部からいきなり読者自身がさまざまな日常生活上の具体的状況の中に投げ込まれ、同感という想像力を働かせた道徳的判断を促しながら、推論が進められる。こうした日常的な実践における道徳的判断のさまざまな経験的理解を読者自身が反省させられた後に、最終章の第７部においてようやく過去の哲学者たちによる道徳的判断の原理に関する見解が歴史的に提示され、道徳的事象の特殊性を抽象してしまう彼らの誤った過度な理論的一面性が、第６部までの読者自身の道徳的反省の体験に依拠したかたちで説得的に示される。

このように『道徳感情論』において、日常的なさまざまな道徳的事象における行為当事者と観察者の相互の経験的な自己理解の省察という実践的視点からこれまでの道徳理論家たちの言説に関する歴史的な理論的視点へ転換する論述構成も、スミスが道徳というもの

の理論的言説化にさいして、彼が批判したこれまでの哲学者たちの理論化が陥った陥穽を回避するためには、道徳哲学者として道徳的事象の哲学的考察と理論的言説化（再現）はどのように日常的な自明性を踏まえつつ、それらを乗り越えて進められねばならないかを配慮して採り入れたレトリカルな論述構造であったと解釈されねばならない。

道徳的現実の理論的考察と言説の進め方はこのような意味でレトリカルでなければならないというスミスの洞察は、かれによって好んで使われた〈劇場〉と〈批評家〉というメタファーでもって最もよく示されている。社会生活における行為当事者と観察者の相互の同感が織り成す道徳的世界を理論家として外側からでなく、その内側から生き生きと描くというスミスの構想にとって、人生という劇場とその上で上演される〈演技者〉とそれを同感を交えながら見る〈観客〉、その両者の絡み合いにおいて劇の進行を、少し高い席より見つめる〈批評家〉というメタファーこそ道徳的事象の理論化を表現するのに最も最適なモデルであったと考えられる。演劇という構想は、もつれ合って互いに結びつかないように思える諸事象の連続の中に一つのまとまりを思い浮かばせる。そしてそれらの背後にある「本質」や「実体」などについての形而上学的、ないしは認識論的な論議に入り込まずともその特徴について語ることを可能にしている。さらに劇批評家は劇場内において劇の登場人物と観客の双方を観察し、評価して、批評を書くというその実践において彼自身も反省的な道徳行為者である。特に劇批評家は客観的に、距離を置いた立場を取ることによって、その客観性は劇場の外からではなく、劇場内での相対的な客観性であり、批評家の批評の公平さは、繊細な観察と分析を通して自己の評価を洗練された能力とその分野についての豊富な歴史的知識に負うのである。このような特徴を持つ劇批評家というメタファーは道徳的事象を理論化するスミスの立場を言い表すのに最適なものであった(3)。

『道徳感情論』に見られる〈劇場〉と〈批評家〉のメタファーで喩えられたスミスの理論的言説化の哲学的立場は、通常のスミス理解において彼の哲学的立場とみなされるような理神論な理性観とは異なった、むしろそうした理性観には懐疑的で、理性に代わり想像力に基づく合理的探求という人間の理論的営為に関する根本的な考え方に基づいている。そしてこのことは彼の『哲学的論文集』(4) での自然現象の科学的探求を論じた「天文学史」論文(5)、絵画、彫像、音楽などの芸術の美学的批評を扱った「模倣芸術論」(6)、さらに言語の形成と発展を論じた「言語形成論」(7) などの考察から読み取れる。

スミスによれば、人間の精神は異なる対象間に発見されうる類似を観察することを好み、すべての観念を配列し、組織化して、分類化することができた場合にそれらを知りえたという知解性の快が生ずる。こうして生活習慣的に確立した想像力による滑らかな観念の関連づけが現象の新奇さなどによって妨げられるとき〈驚異〉して、想像力による新たな滑らかな連結を回復しようとする〈探求〉が生ずる。したがって哲学的（科学的）探求は「ばらばらな対象を一緒にする見えない鎖を示すことによって、この不協和で支離滅裂な諸現象の混乱状態に、秩序を導入し、想像力のこの乱れをしずめ」ようとする努力であるとされる。それゆえ、哲学的（科学的）理論化は「想像力に語りかける学芸（アーツ）の一つである」(8) といわれる。さらにこの哲学的（科学的）探求とその理論化は、一般大衆のその時々の知解性のレベルを超えた、より専門的な経験の蓄積により洗練された精細な思考と感受性を持つ専門家（哲学者、科学者など）によって推し進められるが、彼らの理論化は大衆の知解性になじみ深い原理によって説明されねばならず、「想像力を落ち着かせ、

自然の劇場を、さもなくばそう見えたはずであるよりも、まとまったものにし、したがってより壮麗な光景にする」(9) と語られる。注目すべきはここでも自然の哲学的（科学的）探求とその理論化に関して、スミスが〈劇場〉というメタファーでもって語り、あたかも自然という〈劇場〉で演じられている光景を、一般観衆に対して、専門的に訓練された精細な観察力と思考と感受性でもってその隠された演技や筋の意味を示すことによって、観衆に自然の深奥を一層興味深く説き明かして観衆を感嘆させ、納得させる批評家の美学的な技〈アート〉であるかのように描写していることである。

さらに「模倣芸術論」にまで考察を広げると、自然に対する哲学的（科学的）探求と理論化が、芸術作品の美的享受と対照されながら模倣芸術に関連づけられて、根底的にはその一種とみなされていることがわかる。芸術作品において対象の真実さを表現する芸術家の技法は、どのような技でもってわれわれを驚嘆させるような作品が生み出されたかをわれわれに知覚的に理解させる。「われわれはその効果に感嘆し、眼を見張る。そしてわれわれは自ら楽しみ、その驚嘆すべき効果がどんな風にもたらされるかを、自分がある程度理解できることを知って満足する」(10)。他方、科学的探究の対象である自然みずからは観察者に対して、どのように驚嘆すべき結果が生み出されたのかを明らかにしない。したがってその科学的探求は「さもなくばそう見えたはずよりもまとまったものにし、したがってより壮麗な光景にする」(11) ようにわれわれの眺望をあらためる＜技＞である。しかしこのような違いをもちながらも、芸術作品が観衆に対して想像による同感を通じて対象のイメージを生み出し、芸術家が作品を創作した時に感受したものと同種の感受をひき起こすように、哲学的（科学的）探求も観衆にとって同感のはたらきによって異なる対象の経験をさせるイメージに対応する対象の観念が作られるような構成の規則を作り上げるのであり、その意味で広くいえば人間精神の模倣芸術の一種ともみなせるのである。

さらにまた「言語形成」に関する論文では、言語の形成もそうした模倣芸術の一種として説明されている。

言語記号はその対象のイメージを直接的に呼び起すことによって、模倣された対象を間接的に表示するが、その表示された対象のイメージを構成する観念連合としての意味論上の規則はその言語共同体で受け入れられた指標としての包括性、一貫性、親密性、美的選好などからなるコンベンショナルなものである。

このように、自然、芸術、言語などに対するスミスの論考を考察してみるかぎり、スミスが〈劇場〉や〈批評家〉などのメタファーを使って思い描いていた哲学的（科学的）探求と理論化は、なによりもその理論化がもたらす包括性、一貫性、親密性、および美的選好などによる知解性と説得性に、すなわちレトリカルな合理性をめざしたものであって、事象の深奥にある客観的真理を理性能力によって把握するような理神論的理性観に立脚した理論化は考えられていなかった、あるいはむしろそうした理性観に強く懐疑的であったといえるのである。こうした探求とその理論化の構想を根底において、批評家に喩えられる哲学者や科学者の理論化には、道徳的事象の領域のみならず、自然、芸術、言語の領域など全般をふくめて、その度合いの違いはあれ必然的にレトリック的要素を伴うといえる。

2．道徳哲学体系の一部としての『諸国民の富』とレトリック

以上のようなこれまでの論述の結論から、今やわれわれがふたたびスミスの道徳哲学とレトリックの関係に関する問いかけに立ち返るとき、さらに言及しておかなければならない問題は、スミスの道徳哲学の構想における広義の法学とその一部として形成された経済学とレトリックとの関係であろう。

スミス研究では周知のことではあるが、スミスは道徳哲学の体系的な構想において、狭義の倫理学だけでなく、広義の法学、そしてその一部を構成する経済学を包摂していた。現在の用語で言えば社会科学体系ともいえる道徳哲学のこうした体系的構想はグラスゴウ大学時代にほぼ輪郭をなしていた。グラスゴウ大学講義の受講者であったジョン・ミラーによれば、彼の講義は、自然神学、倫理学、法学、経済学の四つの部門からなり、そこでは正義を原理とする部門として、公法ならびに私法にわたり、最も粗野な時代から最も洗練された時代に至るまでの法の漸次的進歩をあとづけ、そして生計にまた財産の蓄積に貢献する諸技術が、法および統治のうえに、それに応じた改善または変更をもたらす諸効果を指摘しようとしたそうである。さらに講義の最後の部分は便宜の原理にもとづき、そして国家の富と力と繁栄との増進を狙いとする政治的諸規制を吟味して、この観点から商業や財政や教育や軍事上の諸施設に関する政治的諸制度を考察したものであり、その実質的内容は後に刊行された『諸国民の富の性質と原因に関する研究』（『国富論』）に含まれていたそうである(12)。

このように既存の経済政策の学（重商主義経済学）の系譜とは異なり、道徳哲学の思想的系譜の中からその一環として形成されたスミスの経済学の書『国富論』(13) は、経済と政治に本質に関する深い理論的探求を、すぐれて時代的な焦眉の問題から発する時論的な問いかけから、すなわち重商主義政策の危機に対する批判と歴史反省の観点から強く読者に促すものであった。スミス研究者のなかで何よりもこの二つの相面の統一的理解を重視した内田義彦の以下にやや長く引用する文章は『国富論』のもつこの理論的でありかつ実践的でもある課題を次のようにかみ砕いて表現している。すなわち「自分の利益に反し、少なくともえんもゆかりもない『富国政策』に広範な人々が強い支持を与えるということがどうして起こりえたのだろうか。国富についての間違った常識・間違った学説がなんらか必然的な理由から発生し、人々を巻き込んで偽の富国政策への同感と支持にかりたてたからに違いない。すると問題はこうなる。近代において、そういう学説が生まれ人々の常識になった根拠あるいは諸事情はどこにあるか。スミスはそう問うて、国富の本質と原因についての研究を、国富についての常識・・の発生根拠の解明と重ね合わせて行います。・・すなわち、まず、国富から富にさかのぼる。そして近代までは富が商品になっていて問題をややこしくしているという事実に着目して、商品というところにまで錘をおろす。そこまで降り切ったところからから出発して、国富が本来何であり、それは本当には何によって増進するのか、その仕組みを、一歩一歩・・経済学的に解明してゆきます。行きながら同時に、平明なはずのことに矛盾する常識が、どのように発生し、間違った政策に対する人々の同感となって政策を推進させるにいたったのかを、同じ経済学の論理そのものによって、これまた一歩一歩明らかにしていった。」(14)

内田のこの文章は、『国富論』の表題の「研究inquiry」が、理論的探求であると同時に

「問いかけ」として、いかに読者に謬見を気づかせ、自明なはず真実を説得的に認識させるというレトリック的目的をもっていたかをきわめて巧みにまた的確に言い表していると思われる。

ここではそうしたレトリック的要素がどのように『国富論』全体に貫かれているかを詳しく考察してみることはできないが、その特徴的な要素について言及してみたい。

まず『国富論』の構成に着目してみると、周知のようにその編成と表題は以下のようになっている。

第一編　労働の生産諸力における改善の諸原因について、
また、その生産物が人民のさまざまの階級の間に自然に分配される秩序について

第二編　資材の性質、蓄積および用途について

第三篇　さまざまの国民における富裕の進歩の差異について

第四篇　経済学の諸体系について

第五篇　主権者または国家の収入について

こうした構成でもって、まず第一編と第二編では経済の理論的探求がなされ、次いで第三篇と第四篇では前者で経済史が、後者で経済政策と経済学説の批判というように歴史的説明部分が続き、最後に第五編で国家における防衛、司法、教育等の諸経費、および租税などの収入に関する勧告的な結論がなされている。

スミスは冒頭の「序論および本書の構想」において、富は労働によって年々再生産される一般消費物資であること、また国が富んでいるかどうかは、その国民一人ひとりがどの程度そうした富を享受できるか、によって決まるという趣意を含意した真実の富についての規定を明示することから論述し始める。このような国の豊かさについて、富を直接生み出している生産労働者の生活の観点に立った定義から出発して、次に富の増大の原因にふれ、(一) 生産的人口一人ひとりが創り出す富の大きさを規定するものとしての労働生産力の大きさと (二) 生産人口と不生産人口との比率が問題で、この二つが第一編と第二編のそれぞれのテーマとされる(15)。

第一編では、こうした真実の富がどのように創り出されるかの機構の分析にとりかかり、分業こそが生産諸力の最も基礎的な要素であること、文明社会の富は私的所有物の交換という形を通じて結合された社会的労働の生産物＝商品であること、商品交換が一般化した文明社会では富は、貨幣ではなく商品の交換価値であり、それはその生産に投下された労働であるとともに、他人の労働に対する支配力でもあること、資本家、地主、労働者からなる階級社会としての文明社会においては商品は価値どおりではなく生産費と利潤、地代が加わって価格が形成されること、分業が発達し、生産力が発展していくことによって労働が追加する価値は増大し、それを基礎として年々、拡大再生産が可能になること、等々の分析が展開される。

スミスはこうして社会的分業に組み込まれた生産労働が価値を増大することを示してから、続く第二編では、生産労働が作り上げた年生産物が資本に充当され、ふたたび生産的労働者の雇用に当てられて再生産規模を規定するその諸条件を分析し、さらに資本の農業、工業、商業の部門への投下構造が市場構造をどのように規定するかを検討する。農業にまず資本が投下されれば自国の農業を土台にして工業が発展し、農・工間に国内市場が形成

されるが、逆に、農業へ資本が投下されず工業もしくは商業に投下されればその国の産業のよってたつ市場的基盤は外国の市場に求めなければならなくなることが明らかにされる。

こうして第一編と第二編における理論的探求からその結論として、第三編の冒頭で述べられるあの有名な「富裕の自然的進歩について」の命題が引き出される。

「事物の自然的運行によれば、あらゆる発展的な社会の資本の大部分は、まず第一に農業にふりむけられ、つぎに製造業にふりむけられ、そして最後に外国商業にふりむけられる。事物のこの順序は、ひじょうに自然であるから、・・どのような社会においても程度の差こそあれつねに観察されることだ、と私は信じている。」

「しかしながら、たとえ事物のこの自然的順序は、このようなあらゆる社会で程度の差こそあれおこったにちがいないにしても、ヨーロッパの近代国家のすべてにおいては、この順序は多くの点においてまったく転倒されてきた。すなわち、これらの国家の諸都市のあるものの外国商業は、そのいっさいの比較的精巧な製造業、つまり遠隔地への販売に適するような諸製造業を導入し、そして諸製造業と外国商業とが、ともどもに農業の主要な改善を生み出した。これらの国の当初の政府の性質上導入され、しかもこの政府が大変革をこうむったあとまでも残存した風俗習慣が、必然にこれらの国を強制してこういう不自然で逆行的な順序を採用させたのである。」(16)

第三編と第四編は、「富裕の自然的進歩」がどのようにヨーロッパにおいて転倒され、「不自然で逆行的な順序」が取り入れられるにいたったのか、という視点からローマ帝国没落後のヨーロッパの歴史をふりかえって、封建制度の遺制によって資本の蓄積が一般的に阻害され転倒した再生産構造の原型が作られ、近世におよんでは重商主義的政策の結果、殖民地貿易などの外国貿易部門への偏重な資本投下等により再生産構造のゆがみは進行し、狭い国内市場と低い生産力の経済構造が作り上げられてきたこと、こうした制度や政策のゆがみがこれまでの経済学説の一面性に反映されてきたことを示した。

このように、『国富論』の論述構成を概観してみると、まず労働し生活する人間の経済活動の諸経験の中に分け入って探求して、その自然的な一般的規則性を理論的に示しだし（第一編、第二編）、ついでそれに関するこれまでの法・政治的施策・社会構造や諸理論・諸学説がどのように構造的なゆがみや一面的に誤った見方を生じさせてきたのかを歴史的に明らかにする（第三編、第四編）、というその論述の仕方が、これまでみてきた『道徳感情論』や「天文学史」の論述構成に酷似していることに気づくであろう。換言すれば、スミスは経済事象の探求と理論化にあっても、これまでわれわれが『道徳感情論』、「天文学史」論文、「言語形成論」、「模倣芸術論」などを通して取り出してみた、あの「劇場」と「批評家」のメタファーで持って思い描いていた「想像力に訴える学芸」としての探求と理論化という彼の考え方を踏襲しているとみなせるであろう(17)。

スミスのこうした探求と理論化の考えは、著述の冒頭から、すなわち第一篇の第一章の分業論から、明白である。

すでにみたように「序論」において、その国民が年々供給される生活物資の潤沢こそが真にその国の豊かさであるとしたスミスが、まず説き起こすのはそれらを産み出す生産力の高さは分業によるということであり、したがってなぜ分業が生産力の高さをもたらすのかについての論証は、論述を主導する最も重要なスタートである。この重要な論証をスミスは、有名なピン製造の例をもって進めるのである。

まずスミスはいきなり、社会全般におよぼす分業のはたらきは、特定の製造業でどのようにおこなわれているかを見てみればたやすく理解されるだろうとして、ピン製造の現場を思い描くよう読者を誘う。そしてもしはじめての職人がピンをたった一人ですべて作るとしたら一日に一本も作れるだろうかと読者に想像させて、ピン一本を作るにさえいかに時間と労力がかかるかを読者自身に疑似体験させる。次にいくつもの部門とさらに多くの作業工程に分割されている実際の工場作業をスミス自身の見聞を引き合いに出して、そこでの生産量がなんと一日一人当たり四千八百本ほどのピンになっていることを対比的に示して、読者をして分業による生産力の高さを実感としてきわめて自然に納得させる(18)。

このように論証は、具体的な事例でもって読者の想像力を喚起し、その営みの中で自らの体験と結合させながら滑らかに自然に結論へと導かれるように考案されている。スミスは『国富論』の論述のその起点であり要とも言うべき分業論の中心的命題の論証をピン製造の例証による類推に依拠させているのである。そしてこの冒頭の記述部分はスミスにとって気軽に考えられていた部分ではなく、スミス研究が示しているように、『国富論草稿』から『国富論』の刊行までにスミスがその記述を書き直しなどして最も推敲した部分であることを考えるならば(19)、スミスにとって経済学の探求とその理論化とはどのようなものと考えられていたについて深い示唆をここから引き出せるのではないだろうか。

さて分業の例の説明においては、工場内での分業の背後には膨大な部門での生産労働の結合（社会的分業）がすでにあることをも同時に示唆しながら、読者の観念の中に次の第二章であつかわれる交換への推論の移行をそれとなく自然に準備させている。この交換の説明においてもその論証の核心は例証による類推からなっている。スミスはここで交換について、分業が「人間の本性のなかにある一定の性向」、「交易し、交換するという性向の非常に緩慢で漸進的ではあるが必然的な帰結」であるテーゼを、それが「人間の本性のなかにある本源的な原理の一つ」か、それとも「理性や言語の諸能力の必然的な帰結」か、という根本的な問題を究明して、そこから根拠づけるようなことを避けて、グレイハウンドや、スパニエルといった犬の例を持ち出して、読者に交易や交換するような犬が存在するかどうかを思い浮かばせながら、いかに交換という日頃われわれがその意味に気づかずおこなっている行為が人間に共通した特有な行為であるかを再認識させる。ついで、文明社会において人はその必要とするほとんどのものが膨大な数の人間同士のあいだで、愛情や好意に頼らずとも可能な自己利益に訴える同意にもとづいた交換によって供給されていること、また交換の網の目のなかで、人びとは自己の才能を独自に多様に開発するとともに開発されたその多様な才能が産み出すものを共同資材として相互で利用できること、等々のこれらの論証も、またもや犬にはそうした現象が見られないことを例にだして読者の想像力に訴えながら自然に了解させる(20)。

このように『国富論』の冒頭から、読者の日常の諸体験を想像力に訴えて、そこに潜む深い意味をあらためて思い起こさせて、観念の新たな意味を獲得させることによって読者の観念の自然に滑らかなつながりへと整序してしていきながら論証を積み上げていくその仕方、換言すれば、読者との想像力にもとづく相互同感に依拠した知解性を例証していくその仕方は、われわれがすでに見てきた『道徳感情論』において人間の同感の存在という根本的事実とその展開を論述していく仕方の同一線上にあるといえよう。われわれが『国富論』の全体を考察するならば、こうした考えがいかにその全編に渡って浸透しているか

を見てとれるであろう。いわゆる理論編といわれる第一編、第二編においてスミスは、経済事象の統計学的な、あるいは心理学的な、いわゆる科学的分析手法から客観的法則を発見し、その抽出された一般的原理や法則から論述しているのではなく、日常的な身近な事例、スミス自身の体験、過去の歴史や法律や文学、演劇などからの事例、等々、多様な例を導入して読者の想像力を喚起し、その場における読者の諸観念の自然な連結を新たに作りだして、経済事象に関する読者の観念の連接の滑らかで自然な推移でもって映じられてくる諸経験の規則的なものの一般化を「事物の自然な運行」として「富裕の自然的進歩」にまで体系的に描きあげているのである。

批評家でもある科学者（哲学者）は、観客であり、ある場合には劇中の主人公にもなる読者に対して、読者の想像力の赴くままにまかせるのではない。批評家（科学者＝哲学者）は人類のこれまでの諸経験についてのより豊かな知見と繊細な感受性でもって、読者がいだいているこれまでの説明における不明瞭さや一貫性のなさや、現在観察されるものと以前の説明の一貫性のなさや緊張によりひき起こされる想像のはたらきを妨げるものを取りのぞき観念の推移を滑らかにする説明を受け入れられるようにするのである。

第三編、第四編のいわゆる歴史的部分は、これまでの歴史における人類の経験のなかから、経済事象に関する人々の想像力による観念の連結が、それぞれの時代、時期、地域、等々において、どのような政治制度、法制度、慣習、あるいは理論的説明によって、ある場合には自然に滑らかに働き、またある場合にはそれを妨げてきたのか、その膨大な事例を教訓的に提示しながら、スミス以前の諸説明の誤りを明らかにして、「事物の自然的な運行」としての「富裕の自然的進歩」の歩みを例証しているのである。

経済学の探求と理論化を導いていったと推定されるスミスのこうした考え方が、経済の客観的な法則を発見し、その真理性を主張したかのように一般的に思われている「経済学のニュートン」的科学観とも、また現在の経済学において一般的な数量的科学観ともいかにかけ離れているかはもはや明瞭であろう。

スミスが「天文学史」で、ニュートンの体系の記述を締めくくっている次の文章は、われわれが、スミス自身の道徳哲学体系とその一部である経済学での科学的探究とその理論化の考察にあっても、妥当することを読みとらなければならないであろう。

「われわれは、すべての哲学体系を、そうでなければばらばらで不調和な自然のできごとを結合するための、単なる想像力の考案物として表示しようと心がけてきたが、そのわれわれでさえ、知らず知らずのうちに、この体系の結合諸原理を表わしている言葉を誤って使っている。つまり、その結合諸原理が、まるで自然が自分の個々の作用を一緒にするのに使用している真の鎖であるかのようである。」(21)

注

（1）内田義彦「アダム・スミス—人文学と経済学」『内田義彦著作集第八巻』、岩波書店、99ページ

（2）以上　第6集（上）

（3）以上　第8集（中）

（4）Adam Smith, *Essay on Philosophical Subjects,* ed.W.P.D.Wightman and J.C. Brryce,1980.（以下、E.P.Sと略称する）　アダム・スミス『アダム・スミス哲学論文集』、篠原久・他訳、名古屋大学出版会（以下『哲学論文集』と略称する）

（5）The History of Astronomy, E.P.S.（以下 H.Aと略称する）「哲学的研究を導き指導する諸原理—天文学の歴史によって例証される」、只腰親和訳、『哲学論文集』、6-109ページ、（以下「天文学史」と略称する）

（6）'Of the Nature of the Imitation which takes place in what are called The Imitative Arts', E.P.S.（以下 O.I.A.と略称する）「いわゆる模倣芸術においておこなわれる模倣の本性について」、須藤壬章・他訳、（以下「模倣芸術論」と略称する）『哲学論文集』、150-213ページ

（7）'Considerations concerning the First Formation of Languages、and the different Genius of original and compounded Languages'（以後、C.F.L.と略称する）、「諸言語の最初の形成および本源的ならびに複合的諸言語の特質のちがいについての諸考察」、水田洋訳、『道徳感情論』（下）、岩波文庫、403-449ページ（以下「言語形成論」と略称する）

（8）E.P.S.（H.A.）p.46,「天文学史」『哲学論文集』、26ページ

（9）ibid. p.46, 同上26ページ

（10）E.S.P.（O.L.A）p185,「模倣芸術論」、同上書、165ページ

（11）ibid. p.46,「天文学史」、同上書26ページ

（12）Dugald Stewart, 'Account of the Life and Writing of Adam Smith', E.P.S. pp274-5

（13）Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations,* ed.R.H.Campbell and A.S.S.Skinner,（以下N.W.と略称する）アダム・スミス『諸国民の富』、大内兵衛・松川七郎訳、岩波文庫、（以下『国富論』と略称する）日本語訳には他に岩波文庫版の新訳『国富論』、水田洋監訳、杉山忠平訳、中公文庫の『国富論』、大河内一男訳があるが、訳文としてはいずれも一長一短があると思われるので引用に当たってはキャノン版に忠実な岩波文庫の大内・松川訳を用いた。

（14）内田義彦，前掲書、65ページ

（15）N.W. pp10-12,『国富論』（一）、89-95ページ

（16）ibid, p380,　同上書（二）、426-7ページ

（17）本章の執筆の間に、近年出版されたSamuel Freischacker, *On Adam Smith's Wealth of Nations, A Philosophical Companion,* 2004, Princeton U.P. Princeton and Oxford,を読むことができた。特にChapter OneおよびTwoにおけるスミスの科学的探究とその理論化に関するフライシュアッカーの見解はかなり筆者の見解に近いことに励まされたとともに、教唆を受けるところも多かった。

(18) ibid, pp14-5, 同上書（一）、99-101ページ

(19) Eary Draft of Part of *The Wealth of Nations,* in *Adam Smih ,Lectures on Jurisprudence,* ed.R.L.Meek, D.D.Raphael and P.G.Stein, アダム・スミス『国富論の草稿　その他』、大道安次郎訳、創元社

(20) N.W. ChapterⅡ,pp25-30,『国富論』（一）、116-123ページ

(21) E.P.S.（H.P.）p.105,「天文学史『哲学論文集』、103ページ